



## ふるさとに思う

森多 優公

四月に入ると、桜前線に添って私の小さな旅が始まる。いつの頃からか、桜の咲くころになるとじっとしてはられない。蕾からすこしずつ開くとき、風に散り舞うはかない美しさに心をときめかせながら、葉桜を好んで描くようになった。

岐阜の山奥にある淡墨桜は樹齢千四百年を過ぎている。写真の画は、昨年ニューヨークで開催された「国際美術展」に出品したもので、桜の画ということもあり、日本の印象と重なったようである。

私は当初、洋画を学んで油絵を描いていたが、いつの間にか岩絵具を駆使する日本画家になっていた。今では水を得たように、描くことが楽しい。今年は大作の依頼が多く屏風を何双か手がけなければならない。屏風は額装してホテルのロビーを飾る予定である。寡作の私にしては欲張って、初めての広い会場での個展

も考えている。

朝比奈の山の中から出て来て、片意地張って描きつづけて来れたのが不思議でならない。東京という場所と、多くの知人友人によって励まされてきたからかもしれない。そして、何よりも私の意欲を駆り立てたのは美校時代の先輩の言葉である。「静岡の人は意志が弱くて大成しにくい。」ということであった。たしかに思い当たるが多かったが、私にとって弱さは強さに変わり得る不可欠の要素であると確信していた。持続性こそが大切だと思い、執拗に花のシリーズを描いて来た。いつか、私の取り柄は執念と粘着性のような気がする。

これからは、花にくわえて富士山や滝など、自然の風景を私自身の眼と言葉で、表現出来る作品を描き続けたいと思っている。  
(第31回卒 画家)